

II 中 間 育 成

1 方 法

中間育成場を図2に示した。前年度の中間育成場よりやや北方の運天原地先であるがほぼ同一海域と考えられる。取り揚げ、輸送はほぼ前年と同方法で行なった。輸送時間は前年度と比較して若干短く、約1時間であった。5区だけは運天原地先での中間育成前に22日間塩屋の生簀で一時蓄養を行なった。中間育成は8月22日から10月16日までの77日間(5区)と9月2日から11月26日までの118日間(7・8区、9区)の2通りであった。

生簀網及び交替はほぼ前年度同様であった。餌料は配合飼料とハマフェキ卵を使用し、今年度は魚肉ミンチは投与しなかった。投餌は午前9:30頃から午後5:00頃まで適宜与えた。魚体が大きくなってからは日曜日は休餌した。

2 結果および考察

中間育成結果を表2に示した。

飼育期間中の水温は20.4~30.7℃であった。中間育成に供した尾数が約2万尾で前年度に比較して極端に少なく、取り揚げ尾数も1.5万尾であった。しかし生残率は73.9%(47.7~94.4%)で良い結果であった。沖出しサイズの大型化が良い生残率を生む結果となった。

今までの結果から、天然での着底サイズの尾叉長18mm程度が、沖出しサイズとして生残率50%以上を見込める大きさである。

表2 中間育成結果

項目		区分		
		5	7・8	9
収 容	月 日	8. 1	9. 2	9. 2
	尾 数(尾)	7,800	7,800	4,900
	全長(平均±S D)	20.9±3.1	30.1±4.7	20.4±2.6
取 り 揚 げ	月 日	10. 16	11. 26	11. 26
	飼 育 日 数(日)	77	118	118
	尾 数(尾)	3,722	7,366	4,066
	生 残 率(%)	47.7	94.4	83.0
	尾叉長(平均±S D)	77.1±12.4	78.7±12.3	

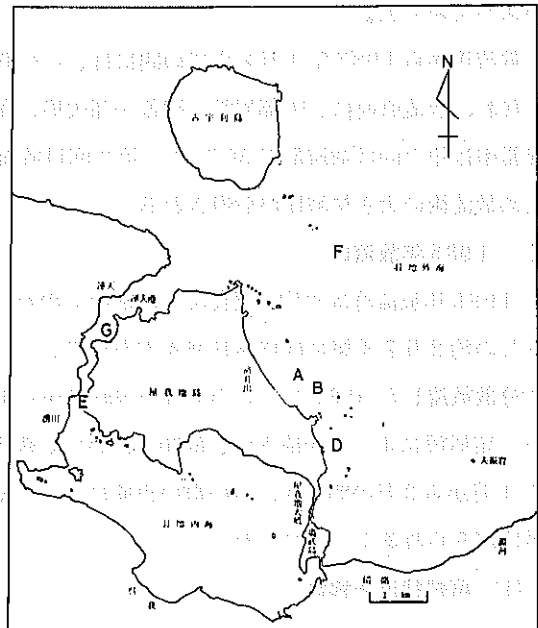


図2 中間育成場と放流点

A、B ; 1984年群放流点 D、E、F ; 1985年群放流点 G ; 1986年群放流点と中間育成場